TAKINOGAWA GAKUEN's magazine

矢川だより

特集 滝乃川学園130年のトビラ

No.126
2021.12.Renewal

「学園都市」と呼ばれる国立
その南部地域は
ママ下湧水や
矢川おんだしから流れる
透明な水が
水路となってまちを巡り
農や暮らしの風景が広がっています

「矢川だより」は
そんな矢川の風景の中で
人を大切にしながら
まちへ門戸を開き
まちと共に育まれてきた
日本初の障害児者のための
学園が届けるお便りです

滝乃川学園の正門

矢川のひと

東京都多摩市在住。横河レンタ・リース勤務。2003年に滝乃川学園福祉文化室の歴史協力に関わり、2008年に評議員、2010年に理事、2019年に理事長に就任。

滝乃川学園14代目理事長
石井 慈典（いしい・よしのり）

石井亮一がつないだ私と学園の縁

『滝乃川学園』創始者の石井亮一は、私の父方の親戚にあたります。うちは東京のごく普通のサラリーマン家庭でしたが、「石井家は佐賀鍋島藩の藩祖以来の外戚家門」であること、「親戚の亮一は日本初の知的障害児のための学園を立ち上げた」ことは、中学生の頃からなんとなく知っていました。大学時代に祖父母の故郷・佐賀を初めて訪ねた時、身内のご老人から「亮一は優秀で軍人か学者か官僚になることを期待されたのに、東京で福祉の途に進んで皆残念がった」こと、そして「私財のほとんどを学園の運営に投じた清貧の人だ」と聞きました。

亮一の想いや私生活を書物などで読んでも、彼は本当に私欲がない人で、まさに聖人。同じ血を引いても私は俗人。真似することは到底できませんが、学園の経営に迷った時、「亮一ならどんなアドバイスをくれるだろう」と考えます。亮一との縁で引き受けた理事長の仕事。彼の志を受け継ぎ、次の世代に伝えていくことが私の使命だと思っています。

2007年に寄贈した石井亮一・筆子夫妻の肖像画は、記念館のエントランスに飾られている。

特集 滝乃川学園

130年のトビラ

2021年12月、滝乃川学園は創立130周年を迎えました。この特集では、滝乃川学園のこれまでの歩みを振り返り、これからの滝乃川学園の未来を見据えたブランディングの取り組みをご紹介します。

石井亮一・筆子夫妻

滝野川時代 ［1891（明治24）年～1906（明治39）年］

開かれた学園

『滝乃川学園』は、知的障害児者が排除の対象であった時代に、「その子に応じた教育を施せば、その子なりに発達する」と確信した石井亮一・筆子夫妻により設立。敷地内に矢川の源流が流れる、門戸を外へ開放した、地域に開かれた学園です。

閉鎖の危機も乗りこえて

『滝乃川』という名前は設立地の東京都北区滝野川に由来します。当時、日本には公的な社会保障制度がなく、学園は亮一の個人事業。亮一は学園のために私財を投じ、学園の方針に共感する人々の支援を受けて運営していました。しかし、園舎を巣鴨へ移転・拡大し、事業が軌道に乗りはじめた1920（大正9）年、園児の失火による火災に見舞われてしまいます。一度は閉鎖を決意しますが、支援者の津田梅子や貞明皇后、日本聖公会などからの支援や激励を受け、石井夫妻は学園の再起を決意したといいます。その時に『財団法人滝乃川学園』として法人化。火災の翌年には渋沢栄一が「石井の経営の労を省いて教育に専念させたい」と第3代理事長に就任し、学園の再建に踏み切ることができたのです。

谷保村（矢川）へ

1928（昭和3）年に北多摩郡谷保村（現在の国立市矢川）へ移転した学園は、教育と就労自立のための施設をつくり新たなスタートを切りました。敷地内を川が流れるこの地を「児童の為に空気よろしく、水清くこの上なく思はれる」と記した筆子の手記が残されています。学園内には常勤医のいる診療所があり、無医村だった谷保村の地域医療にも大きく貢献しました。障害児者を閉じた安全な場所で守るためでなく、地域へ溶け込めるよう開かれた環境をつくりたいという夫妻の考え方は、今でも大切に引き継がれています。

巣鴨時代 ［1906（明治39）年～1928（昭和3）年］

現在地に移転後の滝乃川学園

支援の手により

戦時中の困難を乗り越えた学園は、戦後の社会福祉事業法に基づき『社会福祉法人滝乃川学園』に変わりました。1970（昭和45）年からは成人部としての認可を受け、児童から高齢者までの幅広い利用者に対応できるように。日本の福祉は20～30年の間に大きく進歩したように思えます。ですが『滝乃川学園』のように、戦前に生まれた施設は、そう多くはありません。が存在しており、福祉の礎は、その時代に生きた福祉の利用者、従事者、支援者、それぞれの手によって形成されてきたとも言えるのです。

新たなブランディング

滝乃川学園は、2021年12月で創立130周年。これを契機に、「滝乃川学園のこれからを考える」ブランディングの為のワークショップ&インタビューを行ってきました。学園の職員や矢川地域の方々が参加し、数ヶ月にわたって滝乃川学園の過去・現在を見つめ直し、これから先の姿を見据え、滝乃川学園らしさや将来のあるべき姿などを模索していきました。

そこで聞かれた想いやアイデアは、多様な人々がここに集える「多様性」、地域に開きつながりを生み出す「開放性」、敷地内を流れる矢川の源流やその周辺に広がる緑などの「自然」、日本初の福祉施設として積み重ねられた「歴史」という、滝乃川学園を表す4つのポイントに集約されました。

新しいロゴマークには、滝乃川学園の「滝」の字を、矢川の水や草花、滝乃川学園のシンボルの一つである礼拝堂を示す図形で表現しました。ブルーは「信頼」、グリーンは「安心と調和」、オレンジは「親しみと温もり」、パープルは「伝統と歴史」をそれぞれ表しています。

多様な人の手で積み重ねられた歴史が、この先の未来も、さらに多様な人の手によって新しく積み重ねられていくように。人と人との関係の中で育まれてきた理念や価値観を大切に守りながら、これからの歴史を創っていきます。

滝乃川学園
TAKINOGAWA GAKUEN

滝乃川学園公式ロゴ

矢川　礼拝堂　草花

ブランディングの為のワークショップ実施時の様子

創立130周年
記念ロゴができました

創立130周年記念ロゴを作成された鍋島伊都子さんは、旧・佐賀藩主鍋島家の子孫のお一人で、1937（昭和12）年に滝乃川学園に台臨された秩父宮雍仁親王妃勢津子殿下や、第二代学園長石井筆子の華族女学校時代の教え子の一人である梨本宮守正王妃伊都子殿下ともご親戚にあたります。また、学園創立者で初代学園長の石井亮一や、現理事長の生家である石井家は、鍋島家と古くから血縁があります。

滝乃川学園では、学園の歴史と関わりのある鍋島さんに制作をお願いいたしました。

鍋島伊都子さんより

この度は滝乃川学園の創立130周年記念、本当におめでとうございます。創設から今に到るまで学園のご関係者様が切り拓いて来られた歴史は、天使の光を集めたような優しさと、それを支える強さそのものです。そんな空間をお伝えするお手伝いが出来ればと思い、僭越ながら今回のロゴをお作りしました。少しでもお役に立てれば幸いです。

鍋島 伊都子
（なべしま・いつこ）

大学卒業後、メーカー勤務の後、独立。イラストレーターとしての活動を始める。第1回、第2回アトリエベムスターのポストカードコンペにて、最多得票数「オーディエンス賞」受賞。東京大学医学部、東京スポーツ文化館、東京都社会福祉協議会、個人事業主様などにイラストやデザイン、パンフレットを作成。

矢川のまちめぐり

自然と農、歴史と文化、人々の暮らしが
ゆるやかに流れる矢川エリアを中心に、
国立のまちをめぐりたくなるスポットを紹介します。

今回のテーマ
『滝乃川学園』
ゆかりの場所

石井亮一・筆子記念館

―国登録有形文化財

1928（昭和3）年に竣工し、校舎として使われていましたが、1973（昭和48）年に特別学級ができたことで学校に教育の場を移してからは倉庫のようになっていました。2002年の文化財指定をきっかけに、多くの支援者の力添えのもと大規模な修復工事を行い、2009年に石井夫妻の名前を冠した記念館として再びよみがえりました。1階の教室は展示室、2階の講堂では研修、講座、コンサート等の会場として活用されています。

※見学は要事前予約

聖三一礼拝堂

―国立市登録有形文化財

『日本聖公会』のマキム監督の寄附によって建てられた礼拝堂。イギリスの伝統的な教会様式の建築物で、当時の日本では珍しい鉄筋コンクリートのトラス構造。『石井亮一・筆子記念館』と同時に竣工され、1929（昭和4）年に聖別式が行われました。鐘楼の鐘は、イギリスの『ウェストミンスター寺院』の鐘と同じ製造会社の特注品。現在も日曜日に礼拝が行われ、市民の方も出席できます。

天使のピアノ

―国立市登録有形文化財

石井筆子が愛用したピアノ。1885（明治18）年頃に横浜の『デーリング商会』が製造販売したもので、筆子はこのピアノでクリスマス祝会等の演奏を披露したと言われています。筆子の死後、何十年も忘れ去られていましたが、1995年に学園史研究会のメンバーにより発見され、日本に現存する最古のアップライトピアノであることがわかりました。学園と音楽を愛する市民の方々、『日本調律師協会』の献身的な努力によって復元されました。

JR矢川駅

1932（昭和7）年、近隣住民や近隣団体の寄附により開業。『滝乃川学園』は矢川駅（当時は矢川停留所）の初代プラットフォームのコンクリート代を寄附しており、当時の決算書には「矢川停留所コンクリート代150円」という記述が残されています。

矢川のまちめぐり

-『滝乃川学園』ゆかりの場所-

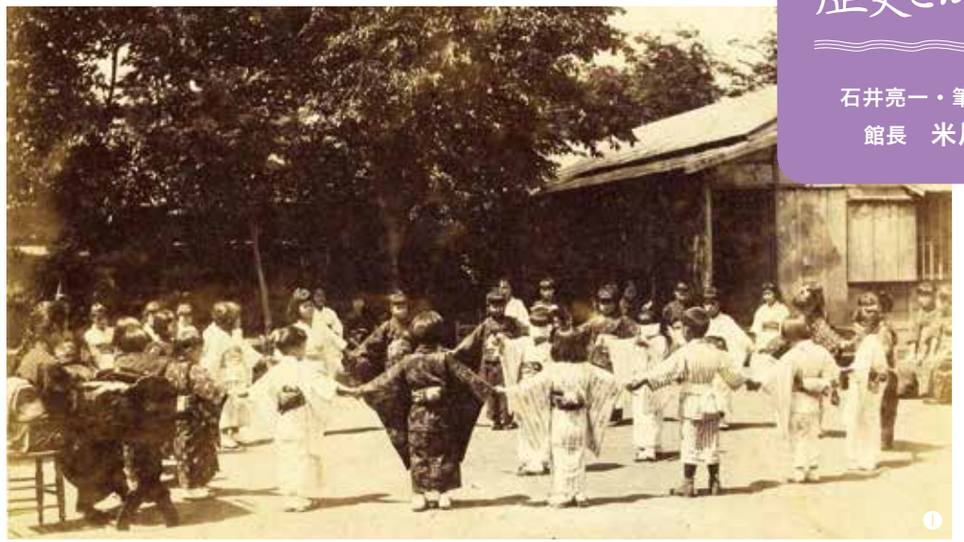
MAP

※滝乃川学園内はコロナ禍により見学できない期間もあります。詳細はホームページにて。

米川館長の歴史さかのぼり

石井亮一・筆子記念館
館長　米川　覚

このコラムは滝乃川学園の深い歴史に魅せられ、２００９年に記念館館長になった米川さんの歴史をさかのぼるコラムである。



①②滝野川村時代　③若い頃の石井亮一

その1　滝乃川学園の始まり

滝乃川学園の創立者石井亮一は、１８６７（慶應３）年佐賀に生まれ、１８８４（明治17）年上京し立教大学に入学した。大学の創始者でアメリカ聖公会の宣教師ウィリアムス師との出会い、洗礼を受け、日本聖公会の敬虔な信徒となる。

１８９０（明治23）年、立教大学を卒業した亮一は、立教女学院の教頭に就任した。翌１８９１（明治24）年、濃尾大震災（岐阜、愛知地方）が発生し、親を失った児童（孤児）が約６００人に及んだ。親を失った女児（孤女）は人身売買の対象とされ社会問題となっていた。

女子教育者であった亮一は孤女の救済に奔走し、20数名の孤女を引き取る。そして孤女のための寄宿舎付きの女学校「孤女学院」を設立する。

引き取った孤女の中に、他と同じように教育しても成果の上がらない女児がいた。知的障害児であった。亮一は、彼女と相対していく中で障害児教育の必要性を強く感じ、手探りで教育を始めた。また、障害児教育を学ぶために先進国であったアメリカに渡り、障害児学校の視察、文献収集など精力的に研究に努めた。帰国後、１８９７（明治30）年に、「孤女学院」を「滝乃川学園」に改め、日本初の知的障害児教育施設としての事業を本格的に開始する。

亮一は何を支えとして行動したのであろうか。後に夫人となる筆子は次のように述べている「いと小さき者の一人に為したるは、即ち我（神）になしたるなり。これは園長（亮一）が何かのお話によく引かれるマタイ伝（聖書）のお言葉でございます」と。男尊女卑で、女子の就学率が30％にも満たない時代に女子教育にあたり、さらに震災孤女を救済し、遂には知的障害児の教育に尽力した亮一の心にはこの教えがあったのだろう。目の前のいと小さき者に為すことが己の道であると。

チャプレンからのクリスマスメッセージ

拒絶の「環」は繋がりの「和」へ

チャプレン　ダビデ倉澤一太郎

年末の風景にすっかり馴染んだクリスマス・リースですが、その起源は「魔除け」でした。キリスト教受入れ以前の西欧のケルト人や北欧のゲルマン人は、神々の力は夏至の頃に最も強くなり、冬至の頃に最も弱くなると信じ、太陽が再び輝きを取り戻し始める冬至を一年の始まりとする暦を用い、冬至祭「ユール」を新年の祭りとして祝い、豊穣を象徴する猪や豚を神々や先祖の霊に捧げ、料理して分かち合いました。一方、神々の力が弱まる冬、特に最弱となる冬至の夜には悪霊や死者の霊が活動を強めると信じたので、悪霊どもの訪問を拒絶するため、冬でも生命力を感じさせる常緑樹の枝葉で、切れ目の無い形状が聖なる力を宿すとされた「魔除けの環」を作って戸口に掛けたのです。これがクリスマス・リースの起源です。後にキリスト教の広まりと共にユール祭はキリスト降誕祭に置き換えられ、「魔除けの環」は「キリストの王冠」を表すものに、さらにキリスト受難の血を受けてその実が赤に変わったと伝えられた柊が素材に加えられたことで、「キリストの荊冠」の表すものになります。さらに19世紀に始まった蠟燭に火を灯してクリスマスの到来を待つアドベント・キャンドルの習慣と組み合わされて、教会ではアドベント・クランツ（リース）と呼ばれるようになって現在に至ります。

最近では年末の子どもたちの楽しみとしてリース作りが行われることも多く、友達と一緒に取り組む子どもたちの笑顔に接しますと、切れ目のない形で繋がりを拒絶したかつての魔除けの「環」を、切れることのない私たちの繋がりの「和」へと変えられたキリストの降誕と受難の出来事に、何より神の愛に感嘆せずにはおられません。

聖三一礼拝堂の扉にかかるクリスマス・リース（2021.11.28撮影）

日本聖公会と滝乃川学園

創立者の石井亮一は、立教大学在学中にキリスト教と出会いました。日本聖公会の祖であり、立教大学の創始者であるウィリアムス主教より教えを受け、信徒となり、夫人の筆子も同主教の下で信徒となりました。敬虔な信徒であった夫妻は、学園の中心に教会を建て、日曜日の礼拝のみならず、日課の最初は朝のお祈りで始まり、夕のお祈りで閉じていました。

設立当初から、日本聖公会からの多大なるご支援をいただいており、学園の130年にわたる歴史は、日本聖公会と共にありました。

チャプレン

チャプレンは、教会以外の学校や病院や社会福祉施設と礼拝堂（チャペル）で働く牧師のことです。滝乃川学園には現在、日本聖公会のチャプレン、ダビデ倉澤一太郎が所属しています。

滝乃川学園ではたらく

子どもから大人まで、幅広い知的障害児者の人々が集う『滝乃川学園』。それぞれの利用者さんと向き合いながらはたらく職員の日々の様子や、仕事への想いを伺います。今回は、白くてふわふわ、おとなしくて人懐っこい「烏骨鶏」を取り巻く人々に焦点を当てました。

インタビュー by 国立人

『滝乃川学園』成人部の利用者さんの多くが、福祉作業と呼ばれる「仕事」をしています。例えば、学園内の洗濯物のクリーニングや、学園の中で使うベンチ作り。マルシェなどで販売するためのお菓子作りや、織物や陶芸品などの作品制作。まちへ出て、資源の回収や公園の清掃などを行うことも。働いてお金をもらう体験をして、色々な「仕事」の中から自分に合うものを見つける利用者さんをサポートするのが、『滝乃川学園』成人部職員の仕事です。

支援者の方の寄附でやってきた烏骨鶏のお世話も、そんな「仕事」の一つ。

「餌や水やり、飼育小屋のお掃除など、烏骨鶏とのふれあいを楽しみにしている方は多いです」（松島さん）

福祉の学校を卒業後、滝乃川学園に入職して以来、烏骨鶏のお世話係は松島さんの役割の一つにもなっています。

「こちらから声かけをすることで『頑張ろう！』と率先してくれる利用者さんもいます。烏骨鶏の存在は、自分が面倒を見なきゃ、自分が動かなきゃ、という役割意識にもつながっているようです」（友永さん）

そんな利用者さんたちとの会話の中で生まれたアイデアから、学園の菓子工房で烏骨鶏の卵を使ったマドレーヌを作って販売する「仕事」も生まれました。

学園の様々な「仕事」には、やりがいをもって続けるうちに、その道を極めた重鎮がいるそうです。人の数だけある適材適所を見つける。そのことは、松島さんと友永さんのやりがいにもなっています。

私たちと一緒に働きませんか！

生活支援員・理学療法士 募集中

詳しくはホームページをご覧ください。

見学等、随時受け付けています。
（法人本部 総務人事部 042-573-3950）

滝乃川学園
TAKINOGAWA GAKUEN

インフォメーションボード

2021年 12月

滝乃川学園 ガーデンプロジェクト

滝乃川学園の中にある500坪ほどの敷地にコミュニティガーデンを作り、学園の内外の人がみんなで協力して、維持管理をしながら、誰もが憩うことができる場所を目指して活動しています。
まずは気軽にガーデンの見学にいらしてください。お待ちしています！

【日時】2022年1月10日（月・祝）
2月12日（土）
3月13日（日）
いずれも10時～15時頃（出入り自由）
【場所】聖三一礼拝堂前コミュニティガーデン
【服装】汚れてもよい服装、靴
ガーデンプロジェクト担当　糸永・高橋（法人本部）

【電話】042-573-3950（9:00～17:00）

滝乃川学園ボランティアを募集しています！

滝乃川学園では、日中活動支援、余暇活動支援、園内環境整備（除草・落ち葉掃きなど学園内の清掃・整備）・洋裁（ミシンができる方）・ヘアカットなどのボランティア活動をしてくださるボランティアの方を募集しています。
ぜひお気軽にお問い合わせください。

ボランティア担当　矢島・矢本（法人本部）

【電話】042-573-3950（9:00～17:00）

ご支援のお願い

日頃より私たち滝乃川学園に温かいお心をお寄せいただき、深く感謝申し上げます。

私たち滝乃川学園は、障害を持つ人々がみずからの幸せを希求できる場を創造、提供し、それを支援する有為な人材を育て、学園の発展のみならず、わが国の障害者福祉のさらなる進歩に貢献できるよう、役職員一同、先駆者としての誇りを胸に、努力していく所存です。

引き続き、皆様のご指導とあたたかいご支援を宜しくお願い申し上げます。

お振り込み先

【ゆうちょ銀行】
専用の払込票がございます。必要な方は、お電話またはメールにてお問い合わせください。

【三井住友銀行】
銀行名　：三井住友銀行国立支店　　口座番号：普通預金 0921148
口座名義：社会福祉法人滝乃川学園 理事長 石井慈典

【三菱UFJ銀行】
銀行名　：三菱UFJ銀行府中支店　　口座番号：普通預金 0002309
口座名義：社会福祉法人滝乃川学園 理事長 石井慈典

130周年記念寄附について

老朽化した作業棟を建て替える「新棟建設プロジェクト」を職員が中心となり立ち上げました。そこには、地域の皆様と共に過ごせるような場所をコンセプトに夢をたくさん詰め込んでいます。現在、企画準備中ですが、近々みなさまにご案内させていただく予定です。お手間を軽減できるよう、インターネット寄附の導入も検討しております。

引き続きのご支援をお願い申し上げます。

感謝録 寄附者ご紹介

日頃より滝乃川学園に多大なるご支援・ご協力をいただき誠にありがとうございます。ホームページにて、令和3年7月1日から10月31日までにご寄附をいただきました皆様をご紹介させていただいております。

矢川だより

No.126

矢川だより 第126号（リニューアル号）
2021年12月発行

発行　社会福祉法人　滝乃川学園
制作　矢川だより編集会議
　　合同会社三画舎

滝乃川学園
TAKINOGAWA GAKUEN

〒186-0015
東京都国立市矢川三丁目16番地の１
電話　042-573-3950（代表）
メール　soumu@takinogawagakuen.jp
ＨＰ　https://www.takinogawagakuen.jp/